

道徳非認論

マクス・バジンスキー

今の統治者や富豪といふ者は、一見其権力が絶大であつて、其地位が甚だ安泰なやうに思はれておるけれども、實際は彼等も又至極困難な問題に遭ふて、之をいかに解決せんかと、大いに苦心しておるのである。さて其問題は何かといへば、則ち彼等の特権が既に、き磯に迫つておるのを、いかに防衛しうるか又人民の「国家」に對する信用が、日々薄弱になりつつあるを、いかにして、維持しうるか。さうして又富豪や強者の墮落と罪惡に就て、益々疑わくを加へつつある人民の心を、いかにして慰めうるかである。

本来統治者にとつて最も必要な事は、民衆の絶対的信用と尊敬の念であつて、之なくしては一日も統治といふ者が行はれさうな筈はなく、無論政府といふものも安全ではない。そこで彼等は是まで教会だの學校だの家族制だの、其ほかいろいろと都合の宜い機關の助けをかり、人民の愚昧と遅鈍性質とを利用して、甚だ不自然な、ちう・君愛國の教を彼等の腹中に、つめこんだのである。

近世に至るまで、かう言ふ策略を行ふのは、彼ら統治者にとつては、さほど困難な事ではなかつた。ところが近代、印刷機械の發明は、たとへ、それが国家的のへん見と階級的の虚偽とを広々伝

播するに大なる力を持つておるとは言へ、それと同時に、あたらしい革命的の自由思想を流布するの効能も又たあつたので、之が為に勇敢な豪まいな新思潮が遂に人民を長き迷夢から喚ひ起し、これらの頭腦をして自ら考へしむるに至つた。いかに愚昧な人間でも少しく考へて見れば、すぐに疑を起して、今の一般に「真理と言ふものは、果して本当の真理であらうか、政府の役人や御用学者や宗教家等が同音に唱へておる「正義と言ふ事は、果して正しい事であらうかと言ふ問題を發せしむるに至つた。僧り・よや帝王が鳥の影を見たり、獸のなき声を聞いたりして自分が治める人民の運命を占うた、そんな呑気な時代は最早遠い昔となつてしまつた、其時代でこそ、りん言だの、たく・宣だのと言へば、人民は之に無上の敬意を払うたか、今日ではそんなものを一向に尊ち・よ・せぬのみならず、現に自分等が選んだ、代ぎ・士や立法者さへも、既に腐敗しつくし、墮落し去つて到底信をおくにたらぬ事を悟つた然り、長い長い年月、暗黒の中に逍遙しておつた人類も、慚く自か・くして今の政治や宗教や社会制どといふ者はただ統治者と資本家が、貧者と労働者をそく・ぼくして其生産物を掠奪すべく、いわゆる「秩序」の内に、彼等を保つ為の手網であることを看破するに至つた。ところがこの平民の自かくと言ふ事は、統治者にとつて非常に危険なものであるから彼等は其人民をいつまでも奴隷の境遇におかんがため、更に新しき方法と道ぐとを、さがさねばならぬ事

となった。これまでは宗教が其道ぐとして甚だ有力なものであったが今日は最早昔日における程の効能がなくなった。丈も世間のおもてだけを見れば、今なほ多くのおてらや、教会がそこ、ここに敬在して恰も痘瘡のあとか人間の顔を醜くしておるやうに過去の迷信の跡をば世にとめておる、そうしていわゆる当世風の商人、政治家までさへも、まづ神に祈りをささげてから其業につくものがある。併しながらこれは博徒が、そのトバへ赴く時に、神様へ供物をあげてえん喜を祈ふたり、イタリーの海賊がその奪掠物の上に、幸福多かれと「仕事」に出る前に、サンタ、マリーの聖壇に、数多くのロウソクをささげて祈願を、こめると言ふはなしの類である。そんな事は、マアさておき實際今の宗教は既に経済的、社会的の方面には、全くその感化力を失ひ、善を助け悪を退くるの力がなくなつた。さうしてかの全能な至喜な神様か恰も商賈の組合員でもあるかのやうに、かして人間から、ダマサレタリ利用せられたりする。かう言ふ敬神家は、種々と隠微な謀を考へて愚直な人民を欺き、其労働の成果を掠奪し、彼等を傷つけ彼等を殺し、其外天地間にあらゆる悪事を行ふて、巧みに其非をた人にのりつけ、さうして自分の靈魂は、神のもとに行くのだと揚言しておる。かくの如く今の宗教は、富者が貧者を压制する事を防ぐにはもはや何の効能もない。但し宗教の無能と欠陥とが謝々くしれ渡つた結果、之を以て一般人民が、今の社会制どに対する反抗をとどめ

る事も又困難になり、従つて彼等を永遠に奴隸的服従の地位に保たんが為に、宗教は既に何等の權威もなくつた、そこで彼ら压制者は宗教の代りに何物かを、さがしたす必要に迫り、辛うじて発見したのは、則ち道徳と言ふ者である。此道徳的教か最も又宗きやうのやうに其性質は強制的の權威を持った者で「是をなせ」「彼をなす勿れ」と命令を発する、けれども其命令の出でくる所は、昔ふうの神様や帝王の口からではなく、いわゆる道徳的良心とか義務とか、その内なる響と言ふやつである。則ち前の压制は外から来たもの、今の束は内から発するだけの相違である。之まで神と君主とは貴族と富豪とに対する人間の行為を拘束した「しうきやうの鉄鎖」が日々に弱くなりいき、今や將に破滅せんとするにあたり、之を救はんが為に道徳の「桎梏」を造つて人類自然のかつ望と民衆の自かくの要求を圧殺せんとするは、かれら強者と権力階級にとつては、けだし、やむを得ぬ次第である。近時のきやう、育と文書は、際限もなく道徳的義務の敷をふやして人民に種々雑多な事を要求し、日々進歩しつつある人類の自かくを根絶せんと夢めておる。それで此道とくの先生はし法官や、しうきやう家よりも一層ぐわん強な残忍な横暴者になりすまして、人間日常の行為は細大もらさず、之にせいさへを加へ、剩へ科学と哲学と芸術の上に乗って追とく、きの律令を宣布した。加え、此道徳は男女の自由なる結合に加してさへ古

めしき禁令を出し、遂に強制的の結婚と買淫制と、さうして猖獗なる花柳病とを産出する事に成功した。此道德の教によると、すべての男女は「おほやけの結婚」を行はぬ限りは決して彼等が生理的の要求を自由に満足させてはならぬのである。所が今の社会では経済的の欠乏則ち貧乏と言ふヤツが邪魔をして、思ふやうに結婚をさせない場合が沢山ある。そこで人間にとって最も情欲の盛んな、性交の必要な時期に於て、わかき男女がとるべき所の道は、ただ慘憺たる孤独的生活と買淫と放蕩との外はない、此三者が則ち今の経済的組織と道德で教くんが人生に寄与したる、ありがたき賜物である。

之に反して、我々は政治でさにも経済でさにも又社会でさにも、其外すべての方向に於て、人間の自由なる活動に、少しの拘束を強制とを加ふるとを非認する。従つて今の道德のやうな弱者と貧者を圧倒する為の道ぐには極力反対するのである。先頃ニューヨークの市街掃除部の人夫がストライキを行ふた時も、新聞記者や政府の役人どもは、彼等が其責にんを忽諸にしたとか、市に対する道德でさの義務を等閑に付したとか言つて、切りに非難の声を放つて居る。しかしながら、此人夫のやうに安い買せんで虐待せられて居た労働者が、正直に丁寧に市街を掃除すること（殊に富豪のていたくの周囲を奇れいにする）が果して当然の義務であらうか、もしもさうであるなら

ばこれこそ立派な紳士階の間にのみ通用すべき義務であつて、彼等労働者の為には、ピタ一文の値もない、どうとくである。紳士階のどうとくは、富者をして、いつまでも寄生虫のやうな、怠惰な生涯を送らせんがため、労働者に而つて其貧困と究乏の状態に忍耐して居よと言ふ。

かくの如く、どうとくと言ふものは一方の金持と掠奪者にと取つて、甚だ割合のよい商賈であると共に、一方貧乏人の為には丈も苛酷なる無期懲役の宣告である。さうしてもしも、我々貧者と弱者が、タマタマ不道德を行ふべき幸福な機会に遇はぬならば、我々は永遠に此苦役を免るる望がないのである。世人は又言ふ、もしも人間が真実に、ある仕事をなし遂げるならば其仕事の中に、自ら「道德的の満足」を感じるであらうと。そこで往々「労働は神聖なり」と言ふ声か我々の耳に響いてくる。けれども是は全々偽善であつて、真に自主独立の意気ある人であるならば、決して賃銀奴隷の仕事の中に「道德的に満足」を感じるべき筈なく、却つてかくの如き苦役につくを無上の屈辱なりとし、彼をして単に富を（た人の為に）貯積する、一種の器械たらしめたる埒制どに反抗せずには居られない。さうしてもしも彼等が実際受けつつある束ばくと圧制とに對して、不平を唱へぬものがあるならば、それは恐らく生れながらの奴隷であつて、全く人の人たる精神と意気を失うたものである。終りに。今の道德は、た人の財産に手をつける事を固く禁じておる。例えば住むべ

き家を持たぬ貧乏人があるとして、かれの道徳的義務は、富豪おでいたくの側を、静かに通過することである。もしも彼が其家の内に這入って、暫らく其疲れた身体を休息させたならば、直ちに犯罪者と名つくる別種の人間となつて、牢獄に投ぜられねはならぬ。かくの如く道とくは、不自然な不人情な非社会的のものである。まうして今の道とく、家は餓えたる乞食が、パンの一きれを取った時声を極めて「盗賊ツ」と、さげびながら、一方に於ては、毎日労働者が作り出す産物の半は以上を掠奪する。「成功したる資本家」の前に。ひざまづき。此大盗を敬礼して、なほ省みぬのである。然り、どうとくとは、単に偽善の別名であつて苟も自由なる思想を抱いたひとか決して尊奉すべきものではない。

(ヨワリ)

△無政府主義は、暴力を以て平安なる人を脅さんとするものに反抗す。

△人が、なすべからざる所の罪悪は、政府も又之を行なふべからざるものなり。

△苦しも政府が、少しにても、人民の為に必要なることをなし能ふとせんか、そは人民が自ら、政府の助けを借りずして、なし能ふ所のことのみ。

△正直なる人間の為に、必要な保護は、ただ国家と言ふ盜賊の害に対する防衛のみ。

古なり。

△今の教育は、人をして上に向つて卑屈従順ならしめ下に向つて傲まん不そん、ならしむるの稽古なり。

△すべての政治は最も險惡にして、又最も压制なるものは人民の一部分によつて、自由にし配せらるべきいわゆる代ぎ政体是なり。